



選考委員から

「人間の尊厳」を極端化する集団殺戮(さ

(ふち)でこそ、新世界を求める。冷戦終結は國家群の対決を舞台から退場させた。代わってゴツゴツした「地理と歴史」の岩山が露出するに至つた。破綻(はたん)国家の内部分解、民族と宗教をめぐる紛争、テロによ

小熊氏の著作は読後の充実感を与えてくれる力作である。終戦直後の10年間と、その次の20年間ほどのあいだの日本知識人が、個人と国家の関係というテーマに対して、それぞれの戦争体験をもとに、真剣に立ち向かつていった軌跡が、バランス

## 地道な研究に

で難しいのは、それぞれの候補作の「面白さ」や「新しさ」が、単なる著者の思いつきに過ぎないのか、それとも必然性をもつ思索の中から生まれてきたものなのかを見極めるところである。今回選

あることである。回顧して貰した二つの作品は、ともに地道な研究に裏打ち

今だからこそ  
大佛次郎の名を冠した  
賞には、素材とか問題意識だけでなく、作品として「薬莖にする當為」の価値を重視すべきだと思う。その意味で、小熊英二氏の「（民主）と（愛憎）」

山内 昌之氏（東大教授）

寺島 実

国々」が妥当な作品だと判断した。日本の戦後を率いた知的指導者たちの現実感覚を生じたものだ。イランとアフガニスタンなど日本もかかわりをもつ地域の紛争処理に関する議論も現実感覚を失わない。

訓練を受けていても 法の支配の「規

君和田 正夫（本社専務・編集担当）

日本は論壇も国際問題の扱い方がずいぶん多様化してきた。過去2回の論壇賞は『途上国のグローバリゼーション』と『現代アラブの社会思想－終末論とイスラム主義』だった。

3回目も受賞作2作のうち一つは、翻訳など

戦争と敗戦の共同  
こそが、戦後思想の

戦争と敗戦の共同体験こそが、戦後思想の分母であつた。小熊英二氏は戦争体験の世代的・個別的な差がもたらす心情と認識の相違を鋭敏に感取し、戦後知識人の諸論述をかつてない精度のレンゲン写真に映し出してみせた。アイデンティティーゼンの志向の大作である。

の中で活躍していく以外に進む道は限られていると考える人たちにとつて、「法の支配」という原則が着々と世界各地で受け入れられているという現実を示す本書の意味は大きい。今回受賞の2作品が、日本と世界の現状に関心をもつ多くの人に読まれることを期待したい。

は、ともすれば民主主義とナショナリズムとを対立させがちなこの国の歴史の論調に対して、いわゆる戦後民主主義の出自がまさにナショナリストであつたことを思い起させてくれたことにおいて、大変に有益であつた。

国際政治観に傾斜しがちの上、本に巡り合えて幸せであった。